

NPO(特定非営利活動法人)

映画美学校

THE FILM SCHOOL OF TOKYO

フィクション・コース 第30期初等科

募集要綱

Fictional Film Production
Elementary Course

2026

映画美学校

映画美学校は、シネクラブの活動や映画祭の製作を通して世界の映画を紹介し続けてきたアテネ・フランセ文化センターと、映画製作、配給、興行を行ってきたユーロスペースとの共同プロジェクトとして1997年に発足しました。翌98年に中央区京橋に教室を移転。2000年4月に東京都より、NPO(特定非営利活動法人)に認証されました。10年には渋谷区円山町KINOHAUSに移転し施設の充実をはかりました。

映画美学校はフィクション・コース(初等科・高等科)、ドキュメンタリー・ワークショップ、映像翻訳講座(基礎科・演習科)、アクトーズ・コース(俳優養成講座)、脚本コース(初等科・高等科)、言語表現コース(ことばの学校基礎科・演習科)、映画上映専門家養成講座を擁しています。昼間働いている社会人も参加できるよう、講義はそれぞれ平日の夜間、あるいは土曜日、日曜日の昼間に行なっています(一部コースを除く)。

現在、多くの映画美学校修了生が映画作家やスタッフをはじめ、映画に関する様々な場面で活躍しています。

映画美学校設立母体

■ アテネ・フランセ文化センター

●外国語学校アテネ・フランセの国際交流部門として1970年に設立。映画による国際交流を目的に世界各国の映画を上映している。技術開発にも力をいれており、コンピュータを駆使した字幕投影システム(S.P.S.)を開発。この技術提供を軸に全国各地で行われる映画祭や美術館関連の製作業務も行っている。89年日本映画ペンクラブ賞、94年日本映画ペンクラブ奨励賞受賞。

●中心となるシネマテークの活動では、「古典映画の再評価と同時代作家の発見」をテーマに、世界の映画を上映するとともに、国内外の映画人を招聘。上映と並行して講演会やシンポジウム、ワークショップなどを行っている。1年間の総上映本数は約200本。講演のいくつかは、「淀川長治映画塾(講談社文庫)」、「シネクラブ時代(フィルムアート社)」としてまとめられている。配給作品としてクリス・マルケル『サン・ソレイユ』、『アレクサンドルの墓』、ダニエル・シュミット『人生の幻影』、フレディ・ムーラーによるH.R.ギーガーの記録映画『パッサーゲン』、ストロブ＝ユイレ『労働者たち、農民たち』、『ルーヴル美術館訪問』、ペドロ・コスタ『映画作家ストロブ＝ユイレ／あなたの微笑みはどこに隠れたの?』、ロベール・ブレッソン『罪の天使たち』など。

●2013年10月、アテネ・フランセの学校法人化に伴い、デジタル化に対応する技術開発を一層加速させるためアテネ・フランセ文化事業株式会社を設立、文化センターは同社が運営する非営利上映団体として活動を続けている。

■ ユーロスペース

●1977年にシネクラブとして発足し、同年に「ドイツ新作映画祭」を開催。ヴィム・ヴェンダースら、現代ドイツを代表する監督を日本に紹介する。その後もヨーロッパおよびNYインディペンデント、アジア映画の新作を中心に輸入公開を続ける。82年にミニシアター「ユーロスペース」を開館、今日のミニシアター・ブームの草分けとなる。2006年に現在の円山町に移転。

●新しい才能を次々と発掘することで知られ、日本に初めて配給した監督にはヴィム・ヴェンダース、デイヴィッド・クロウネンバーグ、レオス・カラックス、ピーター・グリーナウェイ、ペドロ・アルモドバル、張芸謀、アッバス・キアロスタミなどがいる。

●1992年から製作も手掛け、ウェイン・ワン『スモーク』、ダニエル・シュミット『書かれた顔』、ジャン＝ピエール・リモザン『TOKYO EYES』、B・フドイナザーロフ『ルナ・パパ』、フランソワ・オゾン『クリミナル・ラヴァーズ』、レオス・カラックス『ポーラX』、『TOKYO!-メルド-』、アッバス・キアロスタミ『ライク・サムワン・イン・ラブ』などの作品がある。

映画美学校フィクション・コースとは

● 今、求められているのは映画に対する柔軟な姿勢です。

近年のデジタル技術の発展・普及は、映画づくりに大きな変化をもたらしています。家庭用のビデオカメラやスマートフォンで撮影し、パソコンを使って編集するといったことで、より多くの人が個人的に「作品」を手にする事ができ、またそれらを世界に向かって配信することすら可能になっています。また、そのような極めて小規模な作品が、国際的な映画祭で高い評価を受ける、といったことも決して珍しいことではなくなっています。しかし、その一方で、大規模な専門的分業体制で行われる作品製作の形も、依然主流としてあります。そのような製作現場では、やはり映画製作の一定の知識・技術が必要とされています。このように映画製作が多様化する昨今においては、あらゆる状況に柔軟に対応していこうとする姿勢が重要になってきています。

● 映画美学校は「新しい映画」の創造を目指します。

映画づくりには多数の選択肢が存在します。その選択肢の数だけ可能性を秘めているといえるでしょう。しかし「こうあらねばならない」といった、一定の美学や概念でその可能性を閉ざしてしまえば、映画づくりはルーティン化した退屈なものになってしまうでしょう。映画美学校は、どのような映画の作り方が最良の方法なのかを再検討する場として、あるいは、作品の質や規模に見合った、より臨機応変な映画づくりを創出する場として機能することを目指しています。受講生にとっても、また、講師陣にとっても「こういうのはどうだろうか」、「ああいうのはどうだろうか」というふうに常に可能性を模索することのできる学校でありたいと考えています。



● 学生と社会人のための映画学校です。

映画美学校は全日制の学校ではありません。昼間学校に通っている方や働いている方でも参加できるよう、講義は週2〜3日、平日の夜間、あるいは土・日・祝日に行います。これまでに18歳から60歳代まで、個性豊かな人材が集まりました。通常の学校ではありえないそのネットワークが、作品の力に結びついています。

映画に関心を寄せながら今まできっかけをつかめなかった人、これまでたずさわってきた専門分野を映画の中に生かしてみたい人、映画業界という既存の枠にとらわれない映画づくりについて考えている人など、様々な受講生がこの学校に集まることを期待しています。もちろん、そこで蓄積されたエネルギーが、実際の制作現場にフィードバックされるのであれば意味がありません。開講から29年が経過した現在、様々な制作形態を試行する中で、340本におよぶ長・中・短編作品が制作されてきました。そこで生まれた作品の多くが日本の映画界や海外の映画祭で大きな反響を呼び、映画美学校はプロダクション機能を持った新しい教育機関として広く注目を集めてきました。



● 初等科は映画づくりが初めての方を対象に、映画の基礎を学ぶカリキュラムです。

映画制作を学ぶことは、新しい言語を学ぶことに似ています。映画には独自の「文法」が存在し、言葉を喋るようにその文法を使ってドラマを語る必要があるからです。外国語を学ぶとき、教科書に沿って体系的に学ぶ方法と、現地の人ととにかく喋って体で覚える方法の2つがありますが、映画美学校は後者です。短い期間の中で、まずは撮ってみる。そして、撮った映像を見て議論する。その繰り返しの中で、映画の文法を「体験的」に学んでいきます。

初等科は未経験の方が対象です。カリキュラムは大きく分けて2つの分野から成立しています。撮影、照明、録音、編集など映画制作に必要な技術を幅広く体験的に習得していく「技術分野」と、シナリオの書き方、読み込み方、演出技術を学ぶ「演出・脚本分野」。これら2つの分野の指導を第一線で活躍する講師陣から受け、時には受講生間で議論を行うことにより、演出力・脚本力・技術力が身につけられるようになっています。そうして、カリキュラム前半の集大成として「総合実習」で短編映画を作ります。

カリキュラムの後半では、希望者一人一人が、同じ初等科生とともに、15分の短編を制作します。完成作品は上映会を行い、優れた作品は劇場で上映会を行います。



● 高等科は、どこに出しても通用する本格的な映画をつくることを主眼においたカリキュラムです。

高等科では、初等科での経験をふまえ、より専門的で実践的な映画づくりの技術を学び、企画力、脚本力、演出力により磨きをかけていきます。講義の中で開発された優秀企画は修了制作作品として、制作から上映までをサポートします。

● 修了生に対するサポート体制も充実しています。

初等科・高等科とも、優れた作品には海外の映画祭への出品や劇場公開などを積極的にサポートしていきます。また、高等科修了生を対象とする研究科は、ひとりひとりの映画づくりをサポートする恒常的な場として、また当校の“プロダクション機能”をにう人材育成の場として設けられています。その他にも修了生の自主制作作品を上映する「映画美学校映画祭」など多様なバックアップシステムを用意しています。

使用機材リスト 2026.5.23現在

●**撮影・照明機材** Sony PXW-Z190×2、Sony ILME-FX6V×1、Panasonic AU-EVA1×1、Canon EOS C100×2、Meike FF Prime Cine Lens MK-16mm T2.5/24mm T2.1/35mm T2.1/50mm T2.1/85mm T2.1/105mm T2.1/135mm T2.4、SIGMA High Speed Zoom Line 18-35mm T2.0/50-100mm T2.0、SIGMA 10-20mm F3.5 EX DC HSM×2、Canon EF 24-70mm F2.8L II USM×2、Canon EF 70-200mm F2.8L IS II×2、Samyang 14mm F2.8 IF ED UMC Aspherical×1、Sachtler VIDEO20 2×1、Sachtler VIDEO18S2×1、Sachtler VIDEO15SB×1、Manfrotto 509HD×2、Libec LX10 100φ、BlackMagicDesign SmartView 4K×1、Atmos SHINOBI×2、Portkeys HS7T×2、Panasonic BT-LH910G×1、TV-Logic VFM-058W×1、Hollyland MARS 4K×1、Tilta FF-T03×1、Tilta Nucleus-M×1、Egripment マタドールドリー×1、直線レール1.8m×4、直線レール1.6m×1、Libec SWIFT JB JB50×1、ユニフォーカス ライティングキットAL-UK-10-3×2、NEPデジタルパネル付大型LEDライト LED-L1000REF-digi-VCT-V×2、Aputere NOVA P600c×1、Aputure ライトストームLS C300dII×2、ライトストームLS 60x×3、AL-MC4灯セット×2

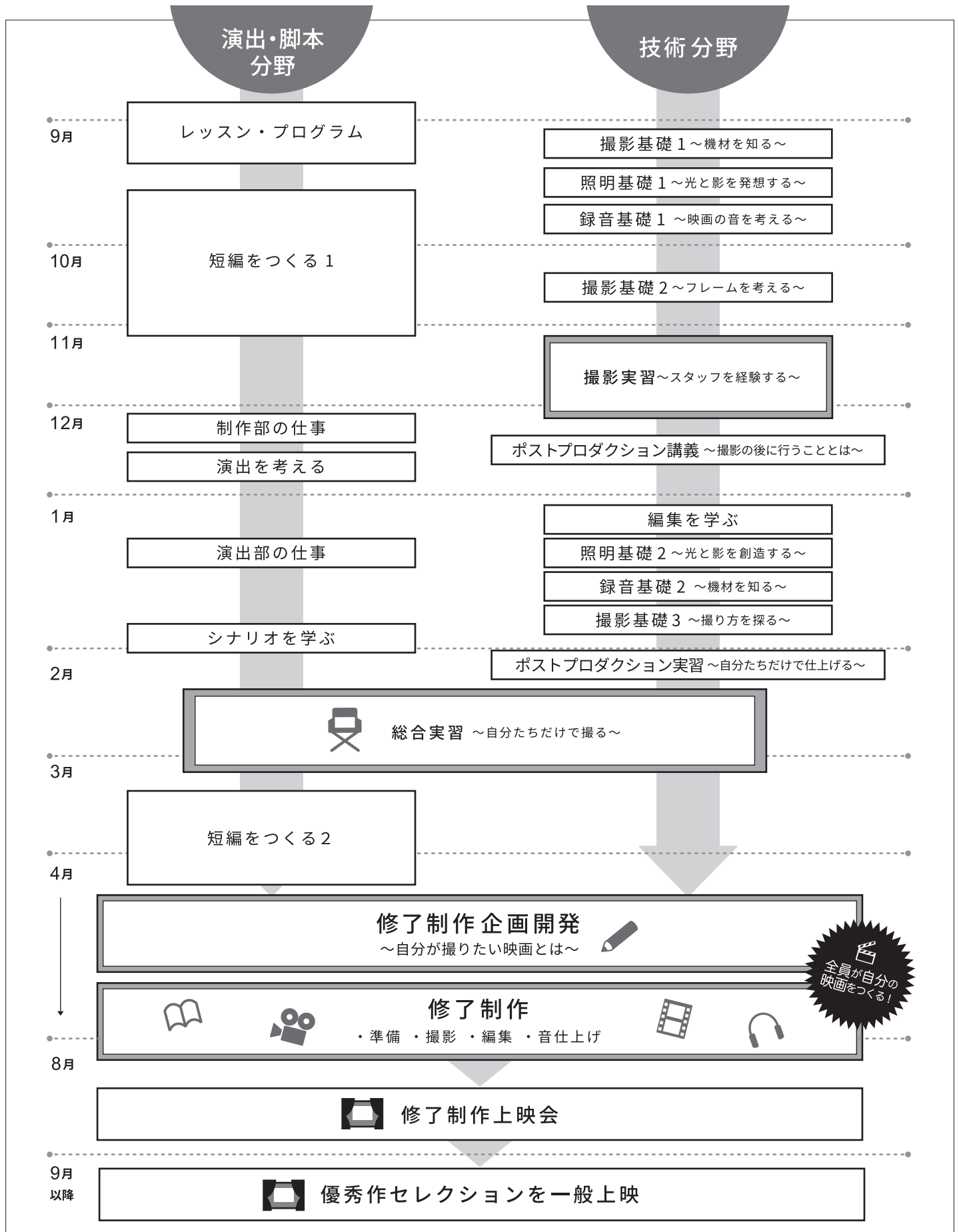
●**録音機材** ZOOM F8n (レコーダー)×1、ZOOM H5 (レコーダー)×7、RODE NTG-3 (コンデンサーマイク)×2、RODE NTG-2 (コンデンサーマイク)×3、SENNHEISER MKE600 (コンデンサーマイク)×4、SONY UWP-D21 (ワイヤレスマイク)×2、KP9CCR KlasicPro シリーズ グラファイトファイバーブームポール×1、GITZOアルミ・ブーム×2、DAIWA アルミ・ブーム×5

●**ポストプロダクション機材** BlackmagicDesign DaVinci Resolve Studio (統合型ポストプロダクションソフトウェア)×9、MacBook Pro (14-inch, M2 MAX, 2023)×1、MacBook Pro (13-inch, M2, 2022)×2、iMac (21-inch, 2017)×3、iMac (Retina 5K, 27-inch, 2017)×1、iMac (Retina 5K, 27-inch, Late 2015)×1、Mac Pro (Late 2013)×1、LG 21:9 UltraWide Monitor×1、ASUS ProArt Display PA32UCR-K×1

●**試写設備・機材** 試写室(定員70名)=35mm映写機×2台、16mm映写機×1台、8mm映写機×2台、デジタルシネマサーバー(Dolby IMS3000)×1台、DLP Cinema プロジェクター(NEC Digital Cinema Projector NC603L)×1台、音響設備:MEYER SOUND デジタルドルビー

初等科カリキュラムの主な流れ

カリキュラム前半では、撮影、照明、録音、編集など映画制作に必要な技術を幅広く体験的に習得していく「技術分野」と、短編課題などでシナリオの書き方や演出を体験的に学ぶ「演出・脚本分野」の2つの分野を同時に学んでいきます。これら2つの分野の指導を第一線で活躍する講師陣から受け、時には受講生間で議論を行うことにより、演出力・脚本力・技術力が身につけられるようになっています。カリキュラムの後半では、希望者一人一人が、同じ初等科生とともに、15分の短編を制作します。完成作品は上映会を行い、優れた作品は劇場で上映会を行います。



<演出・脚本分野>

● 短編をつくる 1

まずはひとり 1 本ずつ、5 分の短編映画を作ります。チームの仲間と一緒に協力しながら、映画を作る楽しさを体験しましょう。

● 演出を考える

シナリオという文字で書かれた 2 次元の設計図を、3 次元の「家」として立体化するのが演出です。脚本をどのように読み込み、どのように演出するのか、その考察と実践を深めます。

● シナリオを学ぶ

映画を「家」にたとえれば、シナリオはその設計図です。「短編をつくる」の経験とアドバイスをふまえ、シナリオの作り方を学びます。

● 制作部の仕事・演出部の仕事

映画制作には様々な部署があります。技術部と違い、一見想像しづらい制作部や演出部はどんなことをしているのかを学びます。

● 総合実習

与えられた課題脚本を班に分かれて映画化します。そもそも映画制作は複数のキャスト・スタッフが持つさまざまな技術を、準備、撮影、仕上げの場で持ち寄り、それらを総合的にまとめていく作業です。監督一人が作るものではありません。本格的な共同作業によって、映画作りの現場を体験します。

● 短編をつくる 2

総合実習で得た知識と経験を、今度は自分の映画にフィードバックします。自分の作る映画の面白さを、どんどん磨いていきましょう。

● 修了制作

9 月から半年間で学んだ集大成として、ひとり 1 本、15 分の映画を制作します。それまでに学んできた演出・シナリオ・技術の知識と経験を総動員する実践の場です。完成した作品は 8 月末に完成講評を行い、その中から選ばれた優秀な作品は、劇場にて上映を行います。

<その他>

● 美術論・サウンドデザイン（映画音楽を中心とした）・映画表現論 など

第一線で活躍するプロによる「美術論」「映画のサウンドデザイン（映画音楽を中心とした）」「映画表現論」などの映画術を学びます。

<技術分野>

● 撮影基礎 1・2・3～機材を知る・フレームを考える・撮り方を探る～

カメラの基礎的な機能を知り、カメラのフレーム（枠）の中と外を考える事で、何ができるのかを学びます。また自分で「ねらいを持って」撮るために、いろいろな撮り方を探ります。

● 照明基礎 1・2～光と影を発想する・光と影を創造する～

「撮影」とは、撮影対象に「光」が当たり光がカメラに反射することで映し出されます。「光」と「影」から映画を考えてみましょう。

● 録音基礎 1・2～映画の音を考える・機材を知る～

映画の重要な要素である音。基礎 1・2 では、映画の「音」を意識すること、そして、実習に向けての機材操作を学びます。

● 撮影実習～スタッフを経験する～

撮影・照明・録音の基礎をふまえ、10 人程度の班で撮影実習を行います。シーンごとにスタッフが移り変わる事で一通りのスタッフワークを経験します。各班にはアシスタントがつきます。

● ポストプロダクション講義～編集～

ポストプロダクションとは映画を撮影した後の作業のことです。撮影実習で撮影した素材を基にストーリーに沿って画を繋いでいく編集。繋ぎ方とともに、編集ソフトの使い方を学びます。

● 編集を学ぶ

シナリオという設計図を演出で立体化・撮影で映像化した後は、編集という作業で映画を再構築します。この講義では編集の基本的な考え方を学びます。

● ポストプロダクション講義&実習

編集から音の仕上げまでポストプロダクションの各工程を学んだ後は、撮影した素材を使い自分たちで実際に仕上げしていきます。

□ 演出・脚本講師

● 大工原正樹 Daikuhara Masaki

1962年生まれ。大学時代から8ミリで自主映画を作り始める。その後、廣木隆一、鎮西尚一、村川透、市川準、村上修、石川均らの助監督を務めた後、89年映画『六本木隼嬢クラブ』でデビュー。以降の主な監督作に『もう・ぎりぎり』(91)、『未亡人誘惑下宿』(95)、『のぞき屋稼業 恥辱の盗撮』『同・夢犯遊戯』(96)、『風俗の穴場』(97)、『美人囹圄捜査官』(97)、『痴漢白書8』(98)、『真・女神転生デビルサマナー』(TV/00)、『七瀬ふたたび』(TV/00)、『赤猫』(04)、『ミニチカ』(TV・06)、『姉ちゃん、ホトホトさまの蟲を使う』(10)、『純情No.1』(11)、『おとしもの』(11)、『破戒くん』(12)、『恋の季節』(13)、『坂本君は見た目だけが真面目』(14)、『新しい人』(15)、『冥婚love』(16)、『ファンタスティック ライムズ!』(17)、『やす焦がし』(17)、『純情No.2』(18)、『検見川奇襲作戦』(19)、『洋子の浮気、カナの失敗』(20)、『苦い記憶』(21)、『裸の監督』(22)、『マーシャの黒』(23)などがある。

● 万田邦敏 Manda Kunitoshi

1956年生まれ。96年、押井守総合監修による実写SF『宇宙貨物船レムナント6』で商業映画監督デビュー。2001年『UNLOVED』がカンヌ映画祭エキュメニク新人賞、レール・ドール賞をダブル受賞。04年に『The Tunnel』(脚本 = 井川耕一郎)がカンヌ映画祭監督週間招待された。他の監督作に『ありがとう』(06)、『接吻』(07)、『面影』(10)、『シンクロナイザー』(16)、『愛のまなざしを』(21)。自主製作作品としてナンセンスコメディ『夫婦刑事』シリーズなど。映画美学校ではコラボレーション作品として、『夜の足跡』(00/シネマ GO ラウンドの一本)、『う・み・め』(04)、『×4』(08)、『イヌミチ』(13)、『波濤』(17)、『復讐の鐘を打て』(20)、『すずり泣く女』(22)、『珠姫の話』(24)、『火の果て』(25)を監督している。

● 横浜聡子 Yokohama Satoko

大学卒業後、映画美学校フィクション・コース第6期に入学。高等科修了制作『ちえみちゃんとこっくんぱっちょ』が2006年第2回CO2オープンコンペ部門最優秀賞を受賞し、翌年制作の『ジャーマン+雨』で07年度日本映画監督協会新人賞を受賞。商業映画デビュー作『ウルトラミラクルラブストーリー』(09)が、トロント国際映画祭、バンクーバー国際映画祭他、多くの海外映画祭にて上映された。その後『バイプレイヤーズ』(17)、『有村架純の撮休』(18)、『季節のない街』(23)などドラマ作品も演出。2021年地元の青森を舞台にした『いとみち』が公開され、第16回大阪アジア映画祭観客賞・グランプリをダブル受賞、第13回TAMA映画賞特別賞、第36回山路ふみ子文化賞など、多数の賞を受賞。最新作『海辺へ行く道』が25年ベルリン国際映画祭ジェネレーション部門スペシャルメンションを受賞、同年劇場公開。

□ 技術講師

● 山田達也 (撮影) Yamada Tatsuya

瀬川順一に師事、ドキュメンタリー、企業VP、IMAXなどに参加。劇映画、CMの助手をへて石原プロモーションにて金宇満司に師事。近年の撮影担当作品は半野喜弘監督『雨にゆれる女』(16)、佐向大監督『教師師』(18)、熊切和嘉監督『WOWOW 連続ドラマW『60 誤判対策室』(18)、古澤健監督『たわわな気持ち』(19) テレビ東京連続ドラマ『お茶にごす』(21)、さかはらあつし監督『AGANAI 地下鉄サリン事件と私』(21)、万田邦敏監督『愛のまなざしを』(21)、金子雅和監督『水虎』(22)、『光る川』(24)など。また映画美学校高等科コラボ作品を多数担当。

● 臼井勝 (録音) Usui Masaru

1968年岐阜市生まれ。グラフィックデザイナーとして勤めるのと並行して、上映イベントのプロデュースに参加したのち、上京。制作部、照明助手などを経て、村上龍監督『TOPAZ<トパーズ>』で録音技師となる。近年の担当作として、映画では広瀬菜々子監督『このごにおよんで愛など』(26年11月公開/録音・ミックス)、高橋伴明監督『安楽死特区』(25/録音)、石田えり監督『私を見た世界』(25/録音・整音・効果・ミックス)、足立紳監督『GoodLuck』(25/録音・整音・効果・ミックス)、立川晋輔監督『くすぶりの狂騒曲』(24/録音・整音・ミックス)、井上淳一監督『青春ジャック』(24/録音・整音・ミックス)、ピエールフォルディス・深田見司監督『めくらやなぎと眠る女(日本語吹き替え版)』(24/録音・整音・音響監督)、小中和哉監督『Single8』(23/録音・整音・効果・ミックス)、早川千絵監督『PLAN75』(22/録音)など。TVドラマでは『はちきんちゃんといごっそう』、『こんばんは、朝山家です。』などがある。また映画美学校制作作品においては、受講生と講師のコラボレーション作品の録音・整音を数多く手掛けている。

● 磯見俊裕 (美術) Isomi Toshihiro

1957年生まれ。様々な職業を経て、木に関するイベントを手掛けていた時に山本政志と出会い、同監督の『てなもんやコネクション』(90)に参加。青山真治監督『Helpless』(96)、石井聰互監督『ユメノ銀河』(97)などの作品で美術を担当。その後も、崔洋一監督『血と骨』(04)、是枝裕和監督『歩いていても』(08)、橋口亮輔監督『ぐるりのこと。』(08)、アミール・ナデリ監督『CUT』(11)、アッバス・キアロスタミ監督『ライク・サムワン・イン・ラブ』(12)、TVドラマ『あまちゃん』(13/美術アドバイザー)、鄭義信監督『焼肉ドラゴン』(18)、土井裕泰監督『罪の声』(20)、手塚眞監督『ぼるばら』(20)、瀬々敬久監督『とんび』(22)など枚挙に暇が無い。また諏訪敦彦監督のデビュー作『2/デュオ』(97)をはじめ、『TANPEN 短編』(01)、七里圭監督『のきなな姉さん』(02)、池田千尋監督『東南角部屋二階の女』(08)などではプロデューサーを務めている。

● 大川景子 (映画編集者) Okawa Keiko

2004年に映画美学校ドキュメンタリー・コースで筒井武文に学ぶ。初めて撮ったドキュメンタリー映画で編集の難しさを痛感し、東京藝術大学大学院映像研究科編集領域に入学。卒業後、諏訪敦彦監督『ユキとユナ』(10)の編集アシスタントを務め、以降も劇映画とドキュメンタリー、さまざまな作品の編集を手掛ける。『ケイコ 目を澄ませて』(22/三宅唱監督)にて日本映画・テレビ編集協会賞を受賞。近年の主な作品に映画『夜明けのすべて』(24/三宅唱監督)、『石がある』(24/太田達成監督)、『SUPER HAPPY FOREVER』(24/五十嵐耕平監督)、『自由なファンシ』(25/筒井武文監督)、『海辺へ行く道』(25/横浜聡子監督)、『旅と日々』(25/三宅唱監督)など。監督作『Oasis』(23)が山形国際ドキュメンタリー映画祭2023(日本プログラム)に出品された。

● 岸野雄一 (音楽) Kishino Yuichi

1963年生まれ。音楽家/DJ/著述家等、多岐に渡る活動を包括する名称として“スタディスト”を名乗り、ポピュラーミュージック全般と映像に携わり活動し、常に革新的な“場”を創造している。東京藝術大学大学院映像研究科と美学校にて教鞭を執る。2013年、坂本龍一、浅田彰、小沼純一と共著『コモンズ・スコーラ・映画音楽』編を上梓。2015年「正しい数の数え方」で第19回文化庁メディア芸術国際エンターテインメント部門大賞を受賞。塩田明彦監督『どこまでもいこう』、黒沢清監督『地獄の警備員』などの音楽&音楽プロデュースを多数手がける。

● 林和哉 (駿河台大学メディア情報学部教授 / 映像プロデューサー / ディレクター) Hayashi Kazuya

東宝や劇団四季などでミュージカル俳優を軸に活動、その後映像制作へ。撮る側と撮られる側の心理の違いを明確に把握し、的確に指摘する演出で独自の世界観を表現した作品群を制作。映画『警泥』(08)が上海国際映画祭アジア新人賞入選、ニューポートビーチフィルムフェスティバル正式招待など国際的な評価を得ている。SONY、Panasonic、CANON、NIKONのプロ映像機器を使用した制作での経験を踏まえ、各メーカーからの依頼により各種セミナーの企画・講師を担当。現在も、Premiere Pro CC、DaVinci Resolve、FinalcutPro、撮影・演技 ワークショップなどのセミナーを企画実施。ドラマ、4K映画などのディレクション、プロデュース、撮影、オフライン・オンライン編集と、入り口から出口まですべてのポジションを守備範囲としている。また多数の映像業界月刊誌の記事を執筆。現在はUnity Technologies Japanにて、Unityで映像分野のクリエイターをアシストするためのツールやワークフロー開発のディレクションに注力している。その他ProNewsにて、「デジタルシネマの歩き方」を連載中。CG-ARTS協会講師。DaVinci Resolve公認トレーナー。日本ポストプロダクション協会アワード審査委員。

● 古市あきほ (プロデューサー) Furuichi Akiho

プリズムピクチャーズ代表。プロデューサー・制作部。劇映画・ドキュメンタリーの国際共同製作に取り組む。大学在学中からなぜか自主映画制作に没頭していたが、その後いつの間にか職業が映画作りになっている。特に映画学校を出ているわけではない。主な参加作品に『猫を放つ』(25)、『Hajat Ali』(26)、『Ha-Chan, Shake your booty!』(26)、『The Fox King』(25)、『透明なわたしたち』(24)、『あんのこと』(24)、『Last Shadow At First Light』(23)など。Berlinale EFM Visitor's Lab、Platform BUSAN、VIPO International Producer Labを修了している。

| | |
|--|--|
| テオ・アンゲロプロス (ギリシャ/映画監督) Theo Angelopoulos Greece/Director | アラン・ギロディ (フランス/映画監督) Alain Guiraudie France/Director |
| オリヴィエ・アサイヤス (フランス/映画監督) Olivier Assayas France/Director | オタル・イオセリアーニ (グルジア/映画作家) Otar Iosseliani Georgia/ Director |
| ドミニク・オーヴレイ (フランス/映画編集者) Dominique Auvray France/Editor | イザベル・ユペール (フランス/俳優) Isabelle Huppert France/Actress |
| トーマス・アルスラン (ドイツ/映画監督) Thomas Arslan Germany/Director | ジャ・ジャンクー (中国/映画監督) Jia Zhang Ke China/Director |
| エミリ・アテフ (ドイツ/映画監督) Emily Atef Germany/ Director | ジョン・ジョスト (アメリカ/映画監督) Jon Jost USA/Director |
| マルコ・ベロッキオ (イタリア/映画監督) Marco Bellocchio Italy/Director | アキ・カウリスマキ (フィンランド/映画監督) Aki Kaurismaki Finland/Director |
| セバスチャン・ベベデーレ (フランス/映画監督) Sebastien Betheder France/Director | アッバス・キアロスタミ (イラン/映画監督) Abbas Kiarostami Iran/Director |
| パオロ・ベンヴェヌーティ (イタリア/映画監督) Paolo Benvenuti Italy/Director | ウド・キア (ドイツ及びアメリカ/映画俳優) Udo Kier Germany・USA/Actor |
| アラン・ベルガラ (フランス/映画批評家・映画監督/パリ第三大学教授) Alain Bergala France/Film Critic, Director | キム・ドンウォン (韓国/映画監督) Kim Dong-won Korea/Director |
| ハルトムート・ビットムスキー (ドイツ/映画監督/カリフォルニア芸術大学教授) Hartmut Bitomsky Germany/Director | ジャン＝マルク・ラランヌ (フランス/映画批評家/『レザンロキユティール』編集長) Jean-Marc Lalanne France/Film Critic |
| シルヴェット・ボドロ (フランス/スクリプター/フランス国立映像音響学院FEMIS教授) Sylvette Baudrot France・USA/ script supervisor | ジャン＝ピエール・リモザン (フランス/映画監督) Jean-Pierre Limosin France/Director |
| パスカール・ボニゼール (フランス/映画監督・脚本家/FEMIS教授) Pascal Bonitzer France/Writer,Director | フランソワーズ・ルブラン (フランス/映画俳優) Françoise Lebrun. France/Actress |
| レオス・カラックス (フランス/映画監督) Leos Carax France/Director | ラウラ・ルケッティ (イタリア/映画監督) Françoise Lebrun. Italy/Director |
| ジャン＝クロード・カリエール (フランス/脚本家/フランス国立映像音響学院FEMIS教授) Jean-Claude Carrière France/Writer | モフセン・マフマルバフ (フランス/映画監督) Mohsen Makhmalbaf France/Director |
| ルー・カステル (コロンビア/俳優) Lou Castel Columbia/Director | ダミアン・マニヴェル (フランス/映画監督) Damian Manivel France/Director |
| ジュリー・コーマン (アメリカ/映画プロデューサー) Julie Corman USA/Producer | ジル・マルシャン (フランス/映画監督・脚本家) Gilles Marchand France/Director, Writer |
| ペドロ・コスタ (ポルトガル/映画監督) Pedro Costa Portugal/Director | アナ・モレイラ (ポルトガル/俳優) Ana Moreira Portugal/Actress |
| コスタ＝ガヴラス (フランス/映画監督) Constantin Costa-Gavras France/Director | フレディ・ムラー (スイス/映画監督) Fredi M. Murer Switzerland/Director |
| アレックス・コックス (イギリス/映画監督) Alex Cox UK/ Director | アミール・ナデリ (イラン/映画監督) Amir Naderi Iran/Director |
| カルロト・コッタ (ポルトガル/映画俳優) Carloto Cotta Portugal/Actor | ビュル・オジエ (フランス/映画俳優) Bulle Ogier France/Actress |
| クレール・ドゥニ (フランス/映画監督) Claire Denis France/Director | ギョーム・ニクルー (フランス/映画監督) Guillaume Nicloux France/Director |
| アルノー・デプレシャン (フランス/映画監督) Arnaud Desplechin France/Director | パク・チャヌク (韓国/映画監督) Park Chan-wook South Korea/Director |
| カトリーヌ・ドヌーヴ (フランス/俳優) Catherine Deneuve France/Actress | ドミニク・パイニーニ (フランス/映画批評家/シネマテーク・フランセーズ元館長) Dominique Paini France/Film Critic |
| マティエ・ドゥー (ラオス/映画監督) Mattie Do Lao PDR/Director | メルヴィル・プポー (フランス/俳優) Melvil Poupaud France/Actor |
| ジャック・ドワイヨン (フランス/映画監督) Jacques Doillon France/Director | ジョアン・ペドロ・ロドリゲス (ポルトガル/映画監督) João Pedro Rodrigues Portugal/Director |
| ジャン＝シャルル・フィトゥッシ (フランス/映画監督) Jean-Charles Fitoussi France/Director | マティアス・ピニエイロ (ポルトガル/映画監督) Matias Piñeiro Argentina/Director |
| ジャン・ドゥーシェ (フランス/映画批評家・映画監督/パリ第三大学教授) Jean Douchet France/Film Critic, Director | ネルソン・ペレイラ・ドス・サントス (ブラジル/映画監督) Nelson Pereira dos Santos Brazil/Director |
| ブリュノ・デュモン (フランス/映画監督) Bruno DUMONT France/Director | ロム・ロンブット (ベルギー/映画監督) Rom Rombt Belgium/Director |
| イルディコー・エニエディ (ハンガリー/映画監督) Ildikó Enyedi Hungary/Director | リュ・スンワン (韓国/映画監督・俳優) Ryoo Seung-wan South Korea/Director,Actor |
| ニコラ・エリオット (フランス/映画批評家/『カイエ・デュ・シネマ』ニューヨーク特派員) Nicolas Elliot Hungary/Film Critic | ダニエル・シュミット (スイス/映画監督) Daniel Schmid Switzerland/Director |
| ビクトル・エリセ (スペイン/映画監督) Victor Erice Spain/Director | イエジー・スコリモフスキ (ポーランド/映画監督) Jerzy Skolimowski Poland/Director |
| フォン・イエン (中国/映画監督) Feng Yan. China/Director | ジャン＝フィリップ・テセ (フランス/映画批評家/『カイエ・デュ・シネマ』副編集長) Jean-Philippe Tessé France/Film Critic |
| ソフィー・フィリエール (フランス/映画監督・脚本家) Sophie Fillières France/Director, Writer | ツァイ・ミンリャン (台湾/映画監督) Tsai Ming-Liang Taiwan/ Director |
| ティエリー・フレモー (フランス/映画批評家・映画監督/カンヌ映画祭総代表) Thierry FRÉMAUX France/Film Critic, Director | セルジュ・トゥビアナ (フランス/映画批評家/シネマテーク・フランセーズ館長) Serge Toubiana France/Film Critic |
| ジャン＝ミシェル・フロドン (フランス/映画批評家/元「ル・モンド」紙映画担当責任者) Jean - Michel Frodon France/Film Critic | ポール・ヴァーホーヴェン (オランダ/映画監督) Paul Verhoeven Netherlands/Director |
| フィリップ・ガレル (フランス/映画監督) Philippe Garrel France/Director | ジョン・ウォーターズ (アメリカ/映画監督) John Waters USA/Director |
| トニー・ガトリフ (フランス/映画監督) Tony Gatlif France/Director | アンヌ・ヴィアゼムスキー (フランス/俳優) Anne Wiazemsky France/Actor |
| ミゲル・ゴメス (映画監督/ポルトガル) Miguel Gomes Portuguese/Director | ヴィム・ヴェンダース (ドイツ/映画監督) Wim Wenders Germany/Director |
| アモス・ギタイ (イスラエル/映画監督) Amos Gitai Israel/Director | フレデリック・ワイズマン (アメリカ/映画監督) Frederick Wiseman USA/Director |

映画美学校フィクション・コース制作作品一覧

【初等科修了作品】

●第1期(1998年制作)

『怯える』 監督・脚本：古澤健 34min/16mm
クレルモンフェラン国際短篇映画祭

『死臭のマリア』 監督・脚本：伊藤晋 27min/16mm

『はるのそら』 監督・脚本：松本知恵 38min/16mm

『鼻の穴』 監督・脚本：稲見一茂 30min/16mm オーバーハウゼン国際短篇映画祭

●第2期(1999年制作)

『集い』 監督・脚本：遠山智子 30min/16mm

『犬を撃つ』 監督・脚本：木村有理子 32min/16mm
カンヌ映画祭シネフォンダシオン部門

『黒アゲハ教授』 監督・脚本：福井廣子 30min/16mm
エクサンプロヴァンス国際短篇映画祭

『よろこび』 監督・脚本：松村浩行 32min/16mm
エクサンプロヴァンス国際短篇映画祭、
オーバーハウゼン国際短篇映画祭国際批評家連盟賞受賞

●第3期(2000年制作)

『夕陽』 監督・脚本：小泉恵美子 20min/16mm

『綱渡り』 監督・脚本：小出豊 33min/16mm

『赤い芝生』 監督・脚本：梅内美江子 38min/16mm

『APE』 監督・脚本：榎屋詩野 32min/16mm

●第4期(2001年制作)

『つもってゆく…』 監督：宮川和浩 36min/16mm

『ふくしゅう』 監督：金子裕昌 38min/16mm

『zero』 監督・脚本：鎌田優子 31min/16mm

『みち』 監督・脚本：佐々木紳 55min/16mm

●第5期(2002年制作)

『三姉妹日記』 監督・脚本：清水信貴 39min/16mm

『人コロシの穴』 監督・脚本：池田千尋 36min/16mm
カンヌ映画祭シネフォンダシオン部門

『カナ子』 監督・脚本：玉城陽子 36min/16mm

『月のある場所』 監督・脚本：杉田協士 43min/16mm

『とどまるか、なくなるか』 監督・脚本・編集：瀬田なつき 36min/DVCAM

●第6期(2003年制作)

『春雨ワンダフル』 監督・脚本：青山あゆみ 36min/16mm
カンヌ映画祭シネフォンダシオン部門

『海を探す』 監督・脚本：小嶋洋平 35min/16mm

『如雨露』 監督・脚本：吉井亜矢子 31min/16mm
オーバーハウゼン国際短篇映画祭

『緑色のカーテン』 監督・脚本：隅達昭 35min/16mm

●第7期(2004年制作)

『三人打ち』 監督・脚本・編集：金剛浩 32min/16mm

『あわぶくたつた』 監督・脚本・編集：渋谷美由貴 31min/16mm

『モリムラ』 監督・脚本・編集：村山圭吾 33min/16mm

『五尺三寸』 監督・脚本・編集：別府裕美子 36min/16mm

●第8期(2005年制作)

『パオパブのけじめ』 監督・脚本・編集：松浦博直 34min/16mm

『out of our tree』 監督・脚本・編集：中矢名男人 31min/16mm

『水の睡り』 監督・脚本・編集：棚兼拓磨 30min/16mm

『底無』 監督・脚本・編集：小嶋健作 31min/16mm

●第9期(2006年制作)

『迷蛾の灯』 監督・脚本：長谷部大輔 16min/16mm→DV

『視界肉体旋律暗号』 監督・脚本：大橋礼子 16min/16mm→DV

『せくつ』 監督・脚本：竹内洋介 16min/16mm→DV

『ざわめき』 監督・脚本：間野勇人 16min/16mm→DV

『復讐』 監督・脚本：吉川慎太郎 16min/16mm→DV

『船乗り』 監督・脚本：中井香菜 16min/16mm→DV

●第10期(2007年制作)

『そこへ行く』 監督・脚本：福井早野香 16min/16mm→DV

『交わる』 監督・脚本：古田円香 16min/16mm→DV

『キミマニア』 監督・脚本：原貴子 18min/16mm→DV

『箱くずし』 監督・脚本：今岡陽子 18min/16mm→DV

『光の中で』 監督・脚本：梶原将一 18min/16mm→DV

『いつか終わるといこと』 監督・脚本：平澤博 20min/16mm→DV

『臨月』 監督・脚本：難波阿丹 15min/16mm→DV

●第11期(2008年制作)

『さらばゲームセンター』 監督・脚本：谷脇邦彦 17min/16mm→DV

『冥土星』 監督・脚本：原太一 18min/16mm→DV

『ラクシュ』 監督・脚本：清水裕紀子 16min/16mm→DV

『迷子ではない、冒険しているんだ。』 監督・脚本：花房菜々子 17min/16mm→DV

『楽園』 監督・脚本：田村恵 17min/16mm→DV

『産道』 監督・脚本：伊藤まき 17min/DV/助成金作品

『牛乳王子』 監督・脚本：内藤瑛亮 15min/16mm→DV

ワールドワイド短編映画祭、Philly Film & Music Festival 2010、
日韓ムービーアワード2010、ニッポンコネクション2010、
スラムダンス映画祭2010、「Festival Court Metrangle」

●第12期(2009年制作)

『帰省』 監督・脚本：青柳一成 16min/16mm→DV

『oldmaid』 監督・脚本：小森はるか 13min/16mm→DV

『通り雨』 監督・脚本：榎祐人 16min/16mm→DV

『矢』 監督・脚本：村上祐一 16min/16mm→DV

『蠅の棲む家』 監督・脚本：市川敦史 16min/16mm→DV

『綱渡り師たち』 監督・脚本：坂上和孝 16min/16mm→DV/助成金作品

●第13期(2010年制作)

『わたしの赤ちゃん』 監督・脚本：磯谷渚 16min/16mm→DV

『恐竜いらない』 監督：本田雅英 16min/16mm→DV

『どこかに落としてきた』 監督・脚本：深津望 14min/16mm→DV

『ミントと山ごもり』 監督・脚本：猪原美代子 16min/16mm→DV

『正当防衛』 監督・脚本：伊野紗紀 16min/16mm→DV

『くちびるコミュニケーション』 監督・脚本：石川貴雄
16min/HDV/助成金作品

●第14期(2011年制作)

『LESSON』 監督・脚本：久保裕章 15min/16mm→DV

『いでよ、空』 監督・脚本：高木栄衣子 16min/16mm→DV

『おもちゃを解放する』 監督・脚本：酒井善三 16min/16mm→DV

『カーマイン』 監督・脚本：森京子 16min/HD/助成金作品

●第15期(2012年制作)

『rumble temple』 監督・脚本：公文名智 15min/16mm→DV

『あくろすぎ』 監督・脚本：中村太紀 16min/16mm→DV

『春生〈ハルオ〉』 監督・脚本：若栗有吾 16min/16mm→DV

『東京196km』 監督・脚本：高橋大佑 16min/16mm→DV

●第16期(2013年制作)

『ぼっち』 監督・脚本：登り山智志 16min/HD

『さよならマチコ』 監督・脚本：加藤正顕 15min/HD

『りんごと、りんこのひみつ』 監督・脚本：倉田春那 16min/HD

『泥人』 監督・脚本：上野皓司 16min/HD

●第17期(2014年制作)

『ブロッケンの妖怪』 監督・脚本：山口佳奈 16min/HD

『たちんぼ』 監督・脚本：横山翔一 16min/HD
ゆうばり国際ファンタスティック映画祭2016
インターナショナル・ショートフィルム・コンペティション部門

『姉と弟』 監督・脚本：中村佳寛 16min/HD

※第18期以降の初等科は希望者全員が監督する修了制作に変更

【高等科作品】

●第1期実習作品(1999年制作)

『薄羽の蝶』 監督・脚本：原瀬涼子 23min/16mm

『意外と死なない』 監督・脚本：大九明子 42min/16mm

●第2期準スカラシップ作品(2002年制作)

『亀の園』 監督・脚本：遠山智子 35min/16mm

●第3期実習作品(2001年制作)

『蘇州の猫』 監督・脚本：内田雅章 33min/16mm
2003年カンヌ映画祭シネフォンダシオン部門

『明るい部屋』 監督・脚本：合田典彦 46min/16mm

●第3期スカラシップ作品(2003年)

『お蛇ヶ池団地』 監督・脚本：堀内浩一 105min/DVCAM

『ENCLOSURE』 監督・脚本：中井友昭 78min/DVCAM

●第4期スカラシップ作品(2004年制作)

『鉄の裁き』 監督・脚本：杉原利明 72min/DV

『風の残響』 監督・脚本：幸修司 58min/DVCAM

●第5期作品(2004年制作)

『爆撃機の眼』 監督・脚本：八坂俊行 60min/DVCAM

『世界は彼女のためにある』 監督・脚本：保坂大輔 100min/DVCAM
ゆうばり国際ファンタスティック映画祭2005
オフシアター部門審査員特別賞、ニッポン・コネクション2016

●第6期作品(2005年制作)

『女たち』 監督・脚本：佐藤央 50min/DVCAM

『ちえみちゃんとかっこんぼつちよ』 監督・脚本：横浜聡子 52min/DVCAM
ニッポンコネクション、ソウル国際女性映画祭

●第7期作品(2005年制作)

『すみれ人形』 監督・脚本：金子雅和 58min/DVCAM
第13回ハンブルグ日本映画祭

●第8期作品(2007年制作)

『sad girl』 監督・脚本：中矢名男人 47min/DVCAM

『ハートに火をつけて』 監督・脚本：朝倉加葉子 30min/DVCAM

『目のまえ』 監督・脚本：川村清人 80min/HDV/助成金作品

●第9期作品(2008年制作)

『魔眼』 監督・脚本：伊藤淳 24min/16mm

『大拳銃』 監督・脚本：大畑創 31min/16mm
ゆうばりファンタスティック映画祭2009オフシアター部門審査員特別賞

●第10期作品

『見知らぬ恋人』(2009年制作) 監督・脚本：川邊崇広 38min/16mm

『パメラ・ジョキシン』(2011年制作) 監督：平澤博/蓼沼風太/麻生忠/
海田晃弘/宮崎大祐 25min/16mm

●第11期作品

『乱心』(2011年制作) 監督：富永圭祐 55min/16mm
ニッポン・コネクション2012

『スケアリー・モンスターズ』(2012年制作) 監督：谷脇邦彦 48min/16mm→HD

『先生を流産させる会』(2011年制作) 監督：内藤瑛亮 62min/HDV/助成金作品
ニッポン・コネクション2012

●第12期作品 (2012年制作)

『おこもりがえし』 監督・脚本:小堂真宏 34min/16mm→HD
『影を追う人』 監督・脚本:佐藤純子 28min/16mm→HD

●第13期作品 (2012年制作)

『愛の異端』 監督・脚本:小岩貴寛 35min/16mm→HD
『反敵』 監督・脚本:伊之紗紀 50min/16mm→DV
『天使の欲望』 監督・脚本:磯谷渚 40min/HD/助成金作品
ゆうばり国際ファンタスティック映画祭2014
オフシアター・コンペティション部門、
ニッポン・コネクション2014、レインダンス国際映画祭2014

●第14期作品 (2013年制作)

『ヴェルニ』 監督・脚本:丸山夏奈 45min/HD

●第15期作品 (2015年制作)

『なんのすべもなく』 監督:若栗有吾、脚本:加藤高浩 48min/HD

●第17期作品 (2017年制作)

『はめられて Road to Love』 監督・脚本:横山翔一 60min/HD
ゆうばり国際ファンタスティック映画祭2017
オフシアター・コンペティション部門北海道知事賞受賞

●第18期作品 (2017年制作)

『ギャルソヌ2つの性を持つ女』 監督・脚本:穂山菜由 30min/HD
『フーコの婚活』 監督・脚本:宮城伸子 30min/HD

●第19期作品 (2018年制作)

『三崎家の設計』 監督・脚本:藤本英志朗 28min/HD
『養子縁組殺人事件』 監督・脚本:吉岡資 38min/HD

●第20期作品 (2019年制作)

『泥』 監督・脚本:成瀬都香 34min/HD
ゆうばり国際ファンタスティック映画祭2020フォービデオゾーン部門、
ソウル国際プライド映画祭
『恋愛準々決勝戦』 監督・脚本:小濱匠 50min/HD/助成金作品

●第21期作品 (2024年制作)

『恋わずらい』 監督・脚本:小嶋貴子 39min/HD/助成金作品

●第22期作品

『闇の経絡』(2023年制作) 監督・脚本:及川礼音 27min/HD
『トーチ』(2024年制作) 監督・脚本:北原七海 27min/HD/助成金作品

●第23期作品 (2024年制作)

『小林葵は行方不明』 監督・脚本:横山裕香 28min/HD
『となりのめぐりちゃん』 監督・脚本:根岸摩耶 23min/HD

●第24期作品 (2024年制作)

『松坂さん』 監督・脚本:畔柳太陽 40min/DCP
PFFアワード2024審査員特別賞、第16回下北沢映画祭グランプリ
『はなとこと』 監督・脚本:田之上裕美 42min/DCP/助成金作品
なら国際映画祭フェスティバル2022 NARA-wave部門、
SKIPシティ国際Dシネマ映画祭2024優秀作品賞

●第25期作品 (2025年制作)

『赤い脚』 監督・脚本:山中隆史 32min/DCP
『よそ者の会』 監督・脚本:西崎羽美 45min/DCP/助成金作品
第21回大阪アジア映画祭インディ・フォーラム部門

●第25期作品 (2026年制作)

『露骨な花』 監督・脚本:藤井柚衣 34min/DCP

【高等科コラボレーション作品】

●第1期(1999年制作)

『大いなる幻影』 監督・脚本:黒沢清 95min/35mm

『どこまでもいこう』

ヴェネツィア国際映画祭、トロント映画祭、
フェスティバル・ドートンヌ・ア・パリ
監督・脚本:塩田明彦 75min/35mm
毎日映画コンクール スポニチグランプリ新人賞、
イラン・イスファハン児童・青少年国際映画祭審査員名誉賞、
ロカルノ映画祭、ロッテルダム映画祭、
ナント三大陸映画祭審査員特別賞、他

●第2期 (2000年制作)

『夜の足跡』 監督:万田邦敏 38min/16mm→BETACAM
ARTE放映作品
『桶屋』 監督・脚本:西山洋市 28min/16mm→BETACAM
『月へ行く』 監督:植岡喜晴 35min/16mm→BETACAM
『寝耳に水』 監督・脚本:井川耕一郎 32min/16mm→BETACAM
TOKYO FILMEX2000上映作品(上記4作品)

●第4期 (2002年制作)

『みつかるまで』 監督:常本琢昭 45min/16mm

●第5期 (2003年制作)

『My Sweet Planet』 監督:瀬々敬久 19min/16mm

●第6期 (2004年制作)

『赤猫』 監督:大工原正樹 42min/DVCAM
『う・み・め』 監督:万田邦敏 28min/DVCAM

●第7期 (2005年制作)

『INAZUMA 稲妻』 監督:西山洋市 30min/DVCAM

●第8期 (2006年制作)

『殺しのはらわた』 監督:篠崎誠 30min/DVCAM
『西みがき』 監督:井川耕一郎 53min/DVCAM

●第9期 (2007年制作)

『先生、夢まちがえた』 監督:古澤健 40min/Hi-8→DVCAM
『狂気の海』 監督・脚本:高橋洋 34min/DVCAM

●第10期

『×(かける)4』(2008年制作) 監督:万田邦敏 40min/DVCAM
『孤独な惑星』(2010年制作) 監督:筒井武文 94min/16mm→35mm

●第11期 (2010年制作)

『土筆の祭』 監督:井土紀州 51min/HDV ニッポン・コネクション2011上映作品
『姉ちゃん、ホトホトさまの蟲を使う』 監督:大工原正樹 49min/HDV
ニッポン・コネクション2012

●第12期 (2011年制作)

『kasanegafuti』 監督:西山洋市 27min/HDV

●第13期 (2011年制作)

『love machine』 監督:古澤健 27min/HDV
『旧支配者のキャロル』 監督:高橋洋 47min/HDV

●第14期 (2012年制作)

『あれから』 監督:篠崎誠 63min/HD
第25回 東京国際映画祭「日本映画・ある視点」部門

●第15期 (2013年制作)

『イヌミチ』 監督:万田邦敏 71min/HD
ゆうばり国際ファンタスティック映画祭2014フォアキャスト部門

●第17期 (2015年制作)

『お母さん、ありがとう』 監督:保坂大輔 39min/HD
ゆうばり国際ファンタスティック映画祭2016
フォアキャスト部門、ニッポン・コネクション2016

●第18期 (2016年制作)

『瑠璃道花虹彩絵』 監督:西山洋市 40min/HD

●第19期 (2017年制作)

『霊的ポリシエヴィキ』 監督:高橋洋 72min/HD
チョール映画祭、ニッポン・コネクション2017、
プチョン国際ファンタスティック映画祭2018

●第20期 (2018年制作)

『波濤』 監督:万田邦敏 30min/HD

●第21期 (2019年制作)

『ネオ十八ムレット』 監督:西山洋市 34min/HD

●第22期 (2020年制作)

『復讐の鐘を打て』 監督:万田邦敏 27min/HD

●第23期 (2021年制作)

『うそつきジャンヌ・ダルク』 監督・監修:高橋洋 監督:福井秀策、倉谷真由
47min/HD
『愛と嫉妬のパンデミック』 総監督:西山洋市 監督:高野一興、中馬康輔、中村健佑
間合建介、宮武邦雄 33min/HD

●第24期 (2022年制作)

『すずり泣く女』 監修:万田邦敏 監督:色川翔太、田之上裕美、土田百恵、
万田邦敏 29min/HD

●第25期 (2023年制作)

『女の決闘』 監修:高橋洋 監督:山中隆史、大工原正樹、鴨林諄直、
高橋洋 46min/HD

●第26期 (2024年制作)

『珠姫の話』 総監修:万田邦敏 監督:森七美子、山田香、渋谷龍、万田邦敏
25min/HD

●第27期 (2025年制作)

『アンティゴネイタス』 脚本・監修:高橋洋 監督:岩崎清香、八木菜々子、久保地穂乃、
二瓶直也 31min/HD
『火の果て』 監督:安藤定和、高木梨冴、西村由花、万田邦敏 19min/HD

【研究科、その他作品】

『すでに老いた彼女のすべてについては語らぬために』(2001年制作)

監督:青山真治 51min/DVCAM

『AA』(2005年制作) 監督:青山真治 443min/Digital BETACAM

『ルック・オブ・ラブ』(2005年制作) 監督・脚本:植岡喜晴 108min/8mm→DVCAM
香港映画祭、全州映画祭、ニッポンコネクション

『4時45分』(2014年制作) 監督:三宅唱 29min/HD

【映画美学学校映画祭スカラシップ作品】

『国道20号線』(2007年制作) 監督・脚本:富田克也 77min/16mm→DVCAM

『TOCHKA』(2008年制作) 監督・脚本:松村浩行 93min/DVCAM
第22回 東京国際映画祭「日本映画・ある視点」部門

映画美学校 沿革 1997年～2026年

| | | | |
|--------------|---|--------------|--|
| 1997年 | | 9月 | F.E.M.I.S.(フェミス/フランス国立映像映画音響学院)との共催による「夏期特別クラス」開講。 |
| 10月 | アテネ・フランセ文化センターとユーロスペースの共同プロジェクトとしてアテネ・フランセにて「映画技術美学講座」初等科(現フィクション・コース初等科)開講(主任講師:黒沢清)。 | 10月 | 山形国際ドキュメンタリー映画祭の「学校プログラム」に参加。 「映画上映専門家養成講座」が(財)国際文化交流推進協会(エース・ジャパン)との共催で、文化庁の支援を受け開講。 |
| 1998年 | | 2004年 | |
| 10月 | 名称を「映画美学校」と改め教室を中央区京橋の片倉ビルに移転。 | 3月 | 「ベドロ・コスタ監督 短期集中講座」開講。 |
| 11月 | 字幕講座(現映像翻訳講座)を開講。 | 4月～12月 | ユーロスペース製作「映画番長」シリーズで、フィクション・コース修了生の安里麻里、古澤健、湊博之、西村晋也、吉田良子が監督デビュー、佐藤有記が脚本家としてデビュー。 |
| 1999年 | | 5月 | フィクション・コース第5期初等科修了作品、吉井亜矢子監督『如雨露』がオーバーハウゼン国際短編映画祭に正式招待。 |
| 2月 | フィクション・コース第1期初等科修了作品、古澤健監督『怯える』クレルモンフェラン国際短編映画祭(仏)コンペティション部門に正式招待。 | 5月 | フィクション・コース第5期初等科修了作品、青山あゆみ監督『春雨ワンダフル』がカンヌ映画祭シネフォンドーション部門に正式招待。 |
| 3月 | ドキュメンタリー・ワークショップ(現ドキュメンタリー・コース)を開講(主任講師:佐藤真)。 | 8月 | 『春雨ワンダフル』が京都学生映画祭で準グランプリ受賞。 |
| 3月～7月 | 高等科カリキュラムの一環として、塩田明彦監督『どこまでもいこう』と黒沢清監督『大いなる幻影』の2本の長篇作品を製作。 | 10月 | 『春雨ワンダフル』がみちのく国際ミステリー映画祭角川オファシアター・コンペティションで最優秀賞受賞。 |
| 4月 | フィクション・コース第1期初等科修了作品、稲見一茂監督『鼻の穴』がオーバーハウゼン国際短編映画祭(ドイツ)コンペティション部門に正式招待。 | 11月 | 短期講座「ジャン＝ピエール・リモザン特別講義」開講。 |
| 8月 | 映画撮影夏期集中講座開講。以降毎年夏に開講。 | 2005年 | |
| 2000年 | | 1月 | フィクション・コース第5期高等科修了作品、坂本大輔監督『世界は彼女ののためにある』がゆうばり国際ファンタスティック映画祭オファシアター・コンペティション部門で審査員特別賞を受賞。 |
| 3月 | 『どこまでもいこう』が文化庁優秀映画賞大賞に選ばれる。 | 10月 | 研究科で講評を受けた自主制作作品、加藤治代監督『チーズとうじ虫』が山形国際ドキュメンタリー映画祭「アジア千波万波」部門に招待され、小川紳介賞と国際批評家連盟賞を受賞。 |
| 4月 | 映画美学校が東京都より特定非営利活動法人(NPO)に認証される。 | 11月 | フィクション・コース第7期初等科修了作品、村山圭吾監督『モリムラ』がみちのく国際ミステリー映画祭角川オファシアター・コンペティション部門で最優秀賞受賞。 |
| 5月 | フィクション・コース第2期初等科修了作品、木村有理子監督『犬を撃つ』がカンヌ映画祭シネフォンドーション部門に正式招待。 | 12月 | 『チーズとうじ虫』がナント3大陸映画祭(仏)ドキュメンタリー部門で最優秀賞を受賞。 |
| 5月～6月 | 松岡錠司監督『アカシアの道』の製作プロダクションとなり、修了生、高等科受講生の一部がスタッフとして参加。 | 2006年 | |
| 8月 | フィクション・コース第2期初等科修了作品、松村浩行監督『よろこび』、フィクション・コース第2期初等科修了作品、福井廣子監督『黒アゲハ教授』がエクサンプロバンス映画祭(フランス)に正式招待。 | 2月 | フィクション・コース第6期高等科修了作品、横浜聡子監督『ちえみちゃんとかっこくんぱっちょ』がCO2オープンコンペ部門で最優秀賞を受賞。 |
| 12月 | 佐藤真監督『SELF AND OTHERS』の製作に協力。 ドキュメンタリーワークショップ作品、飯岡幸子監督『オブディブス王/クナウカ』がアートドキュメンタリー映画祭で上映される。 フィクション・コース第2期高等科コラボレーション作品、万田邦敏監督『夜の足跡』、井川耕一郎監督『寝耳に水』、西山洋市監督『桶屋』、植岡義晴監督『月へ行くと』がTOKYO FILMeX2000で『日本映画考』と題して上映される | 4月 | 『チーズとうじ虫』がアルパ国際映画祭(伊)ニュービジョン部門、ニヨン国際ドキュメンタリー映画祭(スイス)に招待。 『ちえみちゃんとかっこくんぱっちょ』がニッポンコネクション(独)に招待。 |
| 2001年 | | 11月 | 研究生とのコラボレーション作品、青山真治監督『AA』が公開。 |
| 3月 | フィクション・コース第1期高等科で最優秀脚本に選ばれた、清野弥生『害虫』を塩田明彦監督が映画化(製作:日活他)。 | 2007年 | |
| 4月 | 『よろこび』がオーバーハウゼン国際短編映画祭に正式招待され、国際批評家連盟賞を受賞。 片倉ビル地下1階に第2試写室他などの新施設を増設。 | 1月 | 『チーズとうじ虫』がInvitation AWARDSドキュメンタリー賞受賞。 |
| 8月 | 短期講座「夏期音楽美学講座」を開講(コーディネーター:岸野雄一)。 | 4月 | 研究生とのコラボレーション作品、植岡喜晴監督『ルック・オブ・ラブ』が香港映画祭、ニッポンコネクション(独)、全州映画祭(韓)に招待。 |
| 11月 | 群馬県で開催された第16回国民文化祭において、高崎市が主催したシンポジウム『21世紀と映画表現の可能性』に協力。同シンポジウムための映像作品(黒沢清、阪本順治、青山真治らが監督)の製作に協力。 | 2008年 | |
| 12月 | 研究科で講評を受け自主制作された、加瀬澤充監督『あおぞら』がAZコンテストで準グランプリを受賞。 | 3月 | フィクション・コース第9期高等科コラボレーション作品、高橋洋監督『狂気の海』がゆうばり国際ファンタスティック映画祭フォーラムシアター部門に招待。 |
| 2002年 | | 9月 | フィクション・コース第9期初等科修了作品、竹内洋介監督『せぐつ』、フィクション・コース第10期初等科修了作品、古田円香監督『交わる』がショート・フィルム・フェスティバルのアジアコンペティション部門に招待。 |
| 5月 | フィクション・コース第3期高等科実習作品、内田雅章監督『蘇州の猫』がカンヌ映画祭シネフォンドーション部門に正式出品される。 | 2009年 | |
| 6月 | 万田邦敏監督『夜の足跡』がARTE(フランス・ドイツ放送)で放映。 | 2月 | フィクション・コース第9期高等科修了作品、大畑創監督『大拳銃』がゆうばり国際ファンタスティック映画祭のオファシアター・コンペティション部門で審査員特別賞を受賞。 |
| 7月 | フィクション・コース第4期初等科修了作品、佐々木伸監督『みち』がPFFに入選、技術賞(IMAGICA賞)受賞。 | 7月 | 『大拳銃』がPFFに入選し審査員特別賞を受賞。また韓国富川国際ファンタスティック映画祭に招待。 |
| 8月 | 『蘇州の猫』、フィクション・コース第3期高等科実習作品、合田典彦監督『明るい部屋』が京都学生映画祭で準グランプリ受賞。 | 2010年 | |
| 9月 | 「映画美学校映画祭2002」を開催。以降毎年開催。 ドキュメンタリー・コース初等科、田村一郎監督『粘土ができるまで』がAZコンテストで準グランプリ受賞。 | 2月 | 中央区京橋1-7-1戸田ビルディング1階に移転。 |
| 2003年 | | 12月 | 渋谷区円山町1-5 KINOHAUSに移転。オーディトリウム渋谷を開設。 |
| 5月 | フィクション・コース第5期初等科修了作品、池田千尋監督『人コロシの穴』がカンヌ映画祭シネフォンドーション部門に正式招待。 | 2011年 | |
| 7月 | 音楽美学講座を通年の講座として開講。 | 5月 | フィクション・コース第11期高等科コラボレーション作品、井土紀州監督『土竜の祭』、フィクション・コース第11期高等科助成金作品、内藤瑛亮監督『先生を流産させる会』がニッポンコネクション(独)に招待。 アクターズ・コース、脚本コースを開講。 |

| | |
|-----|--|
| 5月 | フィクション・コース第13期初等科修了作品、本田雅英監督『恐竜いらない』が TOHO シネマズ学生映画祭ショートフィルム部門でグランプリと観客賞を受賞。 |
| 7月 | フィクション・コース第 14 期初等科ミニラボ作品、篠崎誠監督『死ね！死ね！シネマ』が韓国富川国際ファンタスティック映画祭に招待。 |
| 11月 | フィクション・コース第 13 期初等科修了作品、伊野紗紀監督『正当防衛』が日本芸術センター映像グランプリを受賞。 |

| | |
|-------|--|
| 2012年 | |
| 3月 | 研究科で講評を受けた自主制作作品、奥谷洋一郎監督『ソレイユのこどもたち』が山形国際ドキュメンタリー映画祭 2011「アジア千波万波」部門にて特別賞を受賞。また Cinéma du Réel 映画祭 (仏) に招待。 |
| 5月 | 『死ね！死ね！シネマ』、フィクション・コース第 11 期高等科修了作品、富永圭佑監督『乱心』、フィクション・コース第 13 期初等科修了作品、磯谷渚監督『わたしの赤ちゃん』がニッポンコネクション (独) に招待。 『正当防衛』が横浜映像天国 2012 にて審査員賞を受賞。 西山洋市監督『kasanegafuti』、古澤健監督『love machine』、高橋洋監督『旧支配者のキャロル』が「コラボ・モンスターズ!!」として公開。 『先生を流産させる会』が公開。 |
| 7月 | 批評家養成ギブス (主任講師・佐々木敦) を開講。 フィクション・コース第13期初等科修了作品、久保裕章監督『LESSON』が、ひめじ国際短編映画祭 2012 にてグランプリを受賞。 |
| 10月 | フィクション・コース第14期高等科コラボレーション作品、篠崎誠監督『あれから』が第25回東京国際映画祭「日本映画・ある視点」部門に正式出品。 |

| | |
|-------|--|
| 2013年 | |
| 3月 | 『ソレイユのこどもたち』が、杭州アジア映画祭の Best of Fests 部門で上映。 『あれから』、脚本コース第 1 期映像化作品、大九明子監督『ただいま、ジャクリーン』が公開。 |
| 7月 | 『ソレイユのこどもたち』が公開。 |
| 11月 | フィクション・コース第13期高等科修了作品、伊乃沙紀監督『反駁』が第7回田辺・弁慶映画祭コンペティション部門東京国際映画祭特別奨励賞を受賞。 |

| | |
|-------|---|
| 2014年 | |
| 3月 | フィクション・コース第16期初等科修了作品、上野皓司監督『泥人』が調布映画祭 2014第17回 ショートフィルム・コンペティショングランプリを受賞。 フィクション・コース第 16 期初等科修了作品、登り山智志監督『ぼっち』が第 8 回 TOHO シネマズ学生映画祭ショートフィルム部門グランプリを受賞。 |
| 5月 | 2015 年度高等科コラボレーション作品、万田邦敏監督『イヌミチ』、脚本コース第 2 期映像化作品、大工原正樹監督『坂本君は見た目だけが真面目』が公開。 |
| 9月 | ドキュメンタリー・コース 2010 年度初等科修了作品、忠地裕子監督『おとなのかかく』が公開。 『泥人』が、第 18 回水戸短編映像祭コンペティション部門にて「水戸市長賞」(準グランプリ) を受賞。 フィクション・コース第 13 期高等科助成金作品、磯谷渚監督『天使の欲望』が、レイダダンス映画祭 feature films 部門 (英)、カメラジャパンフェスティバル 2014 (蘭) にて上映。 |
| 11月 | 文化庁平成26年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業「16ミリフィルムによる映画制作者育成ワークショップ」を開講。 『イヌミチ』他、映画美学校制作作品が韓国 INDIEPLUS にて上映。 |

| | |
|-------|---|
| 2015年 | |
| 4月 | 「Acting in Cinema 映画の演技を学ぶワークショップ」(講師: 万田邦敏・西山洋市) 開催。 |
| 5月 | フィクション・コース第 17 期初等科修了作品、横山翔一監督『たちんぼ』が第 27 回東京学生映画祭 Filmark 賞を受賞。 |
| 9月 | 文化庁平成 27 年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業「映画・演劇を横断し活躍する俳優養成ワークショップ」を開講。以降毎年9月に開講。 アクターズ・コース第 1 期高等科作品、鈴木卓爾監督『ジョギング渡り鳥』が第 37 回びあフィルムフェスティバルにて公式上映。 |
| 10月 | 『たちんぼ』、フィクション・コース第17期初等科修了作品、中村佳寛監督『姉と弟』が第 10 回札幌国際短編映画祭・ジャパンオフシアター「才気溢れる衝撃作品」部門に入選。 |

| | |
|-------|---|
| 2016年 | |
| 2月 | ゆうばり国際ファンタスティック映画祭にてフィクション・コース第 17 期高等科コラボレーション作品、保坂大輔監督『お母さん、ありがとう』、『たちんぼ』が正式上映。 |
| 3月 | 『ジョギング渡り鳥』が公開。 |
| 5月 | 『お母さん、ありがとう』『世界は彼女のためにある』がニッポン・コネクション (独) にて正式上映。 |
| 10月 | 『ジョギング渡り鳥』が第 26 回映画祭 TAMA CINEMA FORUM にて第 8 回 TAMA 映画賞特別賞を受賞。 |

| | |
|-------|--|
| 2017年 | |
| 3月 | フィクション・コース第17期高等科修了制作作品、横山翔一監督『はめられて Road to Love』がゆうばり国際ファンタスティック映画祭 2017 オフシアター・コンペティション部門にて北海道知事賞を受賞。 |
| 10月 | フィクション・コース第19期高等科コラボレーション作品、高橋洋監督『霊的ポリシェヴィッキ』がチオルラ映画祭 (メキシコ) にて正式上映。 |

| | |
|-------|--|
| 2018年 | |
| 2月 | 『霊的ポリシェヴィッキ』が公開。 |
| 3月 | フィクション・コース第20期初等科修了制作作品、西本達哉監督『ナナちゃん、oh main got しょ♡』がゆうばり国際ファンタスティック映画祭にて正式上映。 |
| 6月 | 『霊的ポリシェヴィッキ』がニッポンコネクション 2018 にて正式上映。 |
| 7月 | 『霊的ポリシェヴィッキ』がプチョン国際ファンタスティック映画祭にて正式上映。 |
| 8月 | アクターズ・コース第 2 期高等科作品、鈴木卓爾監督『ゾンからのメッセージ』が公開。 |
| 11月 | フィクション・コース第21期初等科修了制作作品、常間地裕監督『なみぎわ』が西東京市民映画祭2018で最優秀作品賞を受賞 (他、各映画祭にて受賞)。山本十雄馬監督の『灰の蛇』が優秀作品賞を受賞。 |

| | |
|-------|---|
| 2019年 | |
| 4月 | 『ナナちゃん、oh main got しょ♡』が鳥ぜんぶでおーきな祭 第 11 回沖繩国際映画祭クリエイターズ・ファクトリー部門グランプリを受賞。 |

| | |
|-------|---|
| 2020年 | |
| 9月 | フィクション・コース第 20 期高等科修了制作作品、成瀬都香監督『泥』がゆうばり国際ファンタスティック映画祭 2020 にて正式上映。 |
| 11月 | 『泥』がソウル国際プライド映画祭にて正式上映。 フィクション・コース第 22 期初等科修了制作作品、団塚唯我監督『愛をたむけるよ』が第 24 回うえだ城下町映画祭大賞、山形国際ムービーフェスティバル 2020 グランプリ、福井映画祭 14TH 審査員特別賞を受賞。 |

| | |
|-------|--|
| 2021年 | |
| 6月 | フィクション・コース第 19 期高等科修了制作作品、藤本英志朗監督『三崎家の設計』がショートショートフィルムフェスティバル & アジア 2021 にて正式上映。 |
| 7月 | 言語表現コースことばの学校 (主任講師・佐々木敦) を開講。 |
| 9月 | フィクション・コース第 22 期初等科修了制作作品、岩崎敢志監督作品『転回』が第 43 回びあフィルムフェスティバルにて審査員特別賞を受賞。 |
| 10月 | フィクション・コース第 20 期高等科助成金作品、小濱匠監督『恋愛準々決勝戦』が公開。 |

| | |
|-------|---|
| 2022年 | |
| 5月 | 『転回』が第 22 回ニッポンコネクションにて正式上映。 |
| 9月 | フィクション・コース第 24 期初等科修了制作、田之上裕美監督『裸足』がなら国際映画祭フェスティバル 2022 NARA-wave 部門にて正式上映。 |

| | |
|-------|--|
| 2024年 | |
| 7月 | フィクション・コース第 24 期高等科修了制作作品畔柳太陽監督『松坂さん』、第 24 期高等科助成金作品、田之上裕美監督『はなこと』が SKIP シティ国際 D シネマ映画祭国内コンペティション部門にて正式上映。『はなこと』が優秀作品賞を受賞。 |
| 9月 | 『松坂さん』が第 46 回びあフィルムフェスティバルにて審査員特別賞を受賞。 |

| | |
|-------|-------------------------------------|
| 2025年 | |
| 2月 | 『松坂さん』が第 16 回下北沢映画祭にてグランプリを受賞。 |
| 7月 | 映画上映専門家養成講座を開講 (コミュニティシネマセンターとの共催)。 |

| | |
|-------|-------------------------------------|
| 2026年 | |
| 3月 | フィクション・コース第 25 期高等科助成金作品『よそ者の会』が公開。 |
| 5月 | ドキュメンタリー・ワークショップ (制作基礎・編集講評) を開講。 |

映画美学校フィクション・コース第30期初等科 募集要項

■ 受講期間：2026年9月5日(土)から2027年8月末まで。

■ 受講資格：18才以上(学歴、経験の有無は問いません)。

■ 定員：66名

■ 講義日程：週2～3回。原則として月・水の夜間もしくは土日祝日で講義を行います。

※カリキュラム日程の詳細は事務局にお問い合わせください。

※講義は全て日本語で行います。他言語でのフォローは致しかねますので、ご了解の上お申込みください。

※実習によっては、月・水以外の平日夜間に行う場合がございます。

※プロットやシナリオの執筆、課題の制作は講義以外の時間に各自が行います。

※講師の都合により、講義日程や講師に変更の可能性があります。ご了承の上お申し込みください。

■ 受講料：409,000円(税込) ※一括納入が原則ですが、ご希望の方には分割払いでのお支払いも案内いたします。

■ 入学登録料：10,000円(税込) ※映画美学校通年講座をはじめ受講される方のみ

■ 保険料：9,000円(税込)

※受講料の分割払いでのお支払いにつきまして

総額428,000円(受講料409,000円・入学登録料10,000円・保険料9,000円)

219,000円を前払い(入学登録料がかからない方は209,000円) 残額209,000円が分割払いになります。

| お支払回数 | 金利 | 合計金額 | 前払金 | 残額 | 分割払利息 | 分割支払金合計 | 毎月の引き落とし金額 |
|-------|-------|---------|---------|---------|--------|---------|------------|
| 5 | 4.20% | 428,000 | 219,000 | 209,000 | 8,780 | 217,780 | 43,556 |
| 10 | 7.00% | 428,000 | 219,000 | 209,000 | 14,630 | 223,630 | 22,363 |

(単位：円/税込)

■ 講義場所：映画美学校(渋谷区円山町) / 講義・実習は基本対面で実施。ただし都合によりオンラインと併用する場合があります)

■ 申込締切：2026年8月21日(金)まで(尚、締切日以前に定員に達した場合は申込受付を締め切らせて頂きます)。

■ 申込方法：オンラインによる申込

映画美学校ホームページよりお申し込みください。

簡単な選考のうえ、合格者には、合格通知と受講手続きのご案内を、

申込受理から一週間以内にメールまたは郵送いたします。

申し込みはこちら



■ 受講手続：合格通知に記載されている受講手続きに従い、受講料をお振込ください。入金が確認された時点で申込み受付完了となります。その後「早めに申し込んだ人ほど得するレッスン・プログラム」を郵送いたします。

※講義開始に関わらず、申込者の自己都合での解約による受講料の返金は原則お断りいたします。ただし、疾病等、本校がやむを得ないと認める事由についてはご相談に応じます(詳しくは映画美学校約款をご参照ください)。

■ お申込み・お問い合わせ

映画美学校

〒150-0044 東京都渋谷区円山町1-5 KINOHAUS B1F

電話：03-5459-1850 FAX：03-3464-5507 受付時間(月一土)12:00～20:00 HP：www.eigabigakkou.com

映画美学校約款

■ 受講上のご注意

- ◎講義の写真撮影、録画、録音はご遠慮ください。
- ◎持病のある方、あるいは体調不良になられた方は事務局にご相談下さい。
- ◎講義の際に使われる各種の機材・備品などの取り扱いには十分に注意して下さい。機材や備品を大切にすることは映画づくりの基本です。
- ◎館内での私物の管理は、各自で責任を持って行って下さい。賠償の責は負いかねます。また、受講生本人の不注意による事故や物的損害に対しても同様です。
- ◎当校は現役の映画人に講師をお願いしておりますので、講師のご都合またはやむを得ぬ事由により、講師やカリキュラムを変更することがあります。また、交通機関の混乱や、天災地変などやむを得ない事情で、カリキュラムを変更する事があります。
- ◎各コースのカリキュラムは、講師陣により日々検討を重ねております。そのため、要項に記載のカリキュラムが若干変更・修正される可能性もございます。変更・修正の際は理由を説明いたします。
- ◎急なカリキュラムの変更等、当校より緊急連絡をさせていただくことがございます。ご登録の氏名・住所・連絡先等に変更があった場合は、すみやかに事務局にお知らせ下さい。
- ◎受講希望者が一定の人数に達しないクラスは、開講を見合わせる場合もあります。

■ 受講取消の扱い

- ◎いったん納入した受講料は、原則としてご返金できません。各講座の予算は講師陣と事務局が協議して慎重に確定いたしますので、その後のキャンセルはカリキュラムの実現に重大な支障を来します。ただ、病気や転勤など、当校がやむを得ないと認めた場合は、開講日以前であれば下記の計算方法でご返金いたします。その場合、医師による診断書や勤務先の辞令（コピー可）など、受講不可能となった事由を証明する書類をご提出下さい。

受講開始日より起算した返金額

30日前まで：全額の90%

29日前～14日前まで：全額の75%

13日前～7日前まで：全額の50%

6日前～1日前：全額の25%

なお、講義開始後のお申し出は、お受けできません。

■ 安全面について

- ◎映画の撮影時には、スタッフ、キャストともに目の前のことに集中するので、事故が起こりやすいものです。事務局から配布される注意事項をよく読んで厳守し、撮影にかかわる人たち全員が安全面に配慮することで、絶対に事故を防ぐようにして下さい。将来、講座修了後も、映画を制作し続ける限り、一番大切なことです。なお、注意事項に書かれていないことは、遠慮なく事務局にご相談下さい。
- ◎非常口、避難通路などは事前にご確認下さい。災害が発生した場合は、必ず係員の指示に従って行動して下さい。

■ 著作権について

- ◎講義内で行われる個人課題やドキュメンタリー・ワークショップの編集講評の対象となった作品を除き、本校のカリキュラムの一環として制作された画像、動画、サウンド等の著作権は基本的に映画美学校に帰属します。従って、それらの全部又は一部および、授業風景等を録画・録音したものの全部又は一部を、本校の広報・業績・紹介目的のため、任意かつ無償で利用することがあります。その際、著作者の氏名の表示を省略することもあります。諸般の事情により支障のある方は、開講してなるべく早い時期に事務局にご相談下さい。なお、利用にあたっては、第三者の著作権、商標、名誉、信用、肖像権その他の権利を侵害しないように細心の注意を払います。

● お申込み・お問合せ

特定非営利活動法人 **映画美学校**

〒150-0044

東京都渋谷区円山町1-5 KINOHAUS B1F
(渋谷・文化村前〈松濤郵便局前〉交差点左折)

TEL 03-5459-1850 FAX 03-3464-5507

<http://www.eigabigakkou.com>

受付時間(月～土) 12:00～20:00

